道徳ジャーナル

108号

●21世紀　心の時代に
絵本作家という仕事に就いて
いりやまさとし……1
●座談会
どうしていますか？
道徳の授業・評価～前編
川上孝生／須貝牧子／東風安生……4
●どうなるこれからの道徳授業……8
●SDGs×道徳　……i

21世紀 心の時代に

絵本作家という仕事に就いて

絵本作家
いりやまさとし

絵本を作る仕事を始めてから気が付けば二十年近く。その前のイラストレーターとしてのキャリアを含めると、絵を描き続けて三十年になります。

まだまだ駆け出しのつもりでいたのですが、いつの間にか他人から見たら超ベテランと言われるようになってしまいました。絵に関してアカデミックな教育を受けていない私は、心の中で「こんな絵でお金をいただいていいものか？」……と、常に不安な気持ちが心をよぎります。

そんな私がなぜ絵本作家として生活できているのか、絵本を作るとはどういうことなのか、改めて考えてみようと思います。

ストーリーがうまれるとき

絵本作家としてスタートを切ったきっかけに、学研から出版されている〝ぴよちゃん〟という幼児向けの絵本シリーズがあります。牧場に住むひよこが主人公のお話で、友達である様々な動物たちとの日常を描いたものです。

一作目の出版から十八年近く、これまでに多くの続編を出させていただきました。動物たちが主人公のお話ですが、そのストーリーは私自身の

『ぴよちゃんと　ひまわり』（学研）より

経験や家族とのやり取りからヒントを見つけることがほとんどです。

私には二人の息子がおり、彼らが生まれて成長していく過程はまさに絵本作りのテーマの宝庫となっています。

親の手がかかる乳幼児期、学校に通えば友達とのつながり、成長に伴う親子関係の変化、楽しいこともまた辛いこともたくさんありました。

もちろん、自分の幼いころの経験や思い出も重要なテーマになります。ちょっぴり怖かったことや、一人で留守番をしていたときの不安な気持ち、町の雑踏の中で迷子になった記憶、進級したクラスでどうやって友達を見つけたらいいのか、これらのことに幼かった自分は幼いなりにどう向き合っていたのか。また人の親になった今、同じような問題に向き合っている息子たちにどのようにアドバイスをしたらいいのか。様々な問題や思い出、これらをうまく組み合わせて絵本のストーリーを組み立てていくのが私のスタイルです。

絵本のよさと子供たちの力

絵本とは、子供にとって最良の疑似体験ができるものと信じています。

ファンタジーの世界に思いっきり浸るのもよいですし、あるいは物語の主人公に自分を投影して様々な問題を一緒になって考えるのもよいでしょう。

もちろんそれは映画でもテレビでもできますが、やはり自分のペースで読めること、読み聞かせの場合は、読み手とのコミュニケーションが取れることも、絵本の優れている点ではないでしょうか。

今はコロナ禍でお休みしていますが、私もよく読み聞かせ会や、簡単な工作のワークショップを開きます。その経験から普段、動画やゲームに夢中な子供たちでも、みんなで一緒に本を読んだり、工作をしたりすると、不思議な一体感が生まれてくる気がしてなりません。それは私が大人だから余計に感じていることなのかもしれません。イベント終了後は、必ず私も何かエネルギーをもらい、創作のヒントを得ることが幾たびもありました。お話作りにスランプを感じたときなど、子供たちの無心な工作や絵画を見ているだけで何かヒントが降ってくることも多々あります。

本音を言えば、「絵本作家としてこれだけは世に残したい」といった、人生のテーマなどをあまり意識せずに今日まで仕事をしてきました。絵本作家がすべてこのタイプだとは思いませんが、私はこうして日常生活で経験する様々な出来事や悩み事、今、世の中で実際に起こっていることなどをいったん体に取り入れて、自分なりのフィルターを通した物語を作ってきたつもりです。

一冊の絵本

ここまで自分のことを振り返って文章にしてきましたが、ここでどうしても一冊の絵本についてお伝えしておきたいと思います。それは私の最新作の絵本です。

『あかいてぶくろ』作・いりやまさとし
（講談社）定価：本体1400円（税別）
ISBN978-4-06-520906-6

私は二年前、最愛の家族である妻を病気で亡くしました。ある時は希望をもって、ある時はともに悲しむ一喜一憂の闘病生活でした。

病状の変化からある程度の覚悟をしなくてはならないときがきて、私なりに今後の家族のことも考えなくてはいけないと思っていたのですが……。実際に妻が旅立った後の私の精神状態

は想像を超えるものでした。当然、長い人生の中で何人かの親しかった人との別れは経験していましたが、やはり人生のパートナーを失うとはこれほど寂しく、切ないものなのかと思い知らされました。

日常から色彩や輝きが無くなり、世の中の出来事が何かすりガラス越しに行われているような感覚がしばらく続きました。でも私にはまだ手のかかる二人の息子がいますので、日々の生活は続けていかなくてはなりません。

それはすなわち、私は絵本を作り続けなくてはいけないということです。

そんな生活の中で、私は一つのモチーフを見つけました。それは冬の情景でよく見かける道端に落ちている片方だけの手袋でした。ずっと以前から、冬になるといつも視界の片隅に残っていて、なんとなく写真に撮りためたりしていました。

道端に落ちている片方の手袋、その種類は様々で道路工事で使われたと思われる丈夫そうなものから、見るからに高価そうな革製のもの、かわいい子供の毛糸のミトン、どれもが物言わずひっそりと持ち主が探しに戻ってくるのを待っているようです。実際、片手袋という考察のジャンルがあるほど多くの人たちが気にしていることを後で知りました。

私は片方だけになった手袋が当時の自分に思えてならなかったのです。

何気ない日常は普遍的なものだと信じていましたし、ましてや自分より年下の妻が先に逝ってしまうとは考えもしませんでした。

私はこの寂しさを自分の中で整理するためにも、この片方だけの手袋に命を吹き込んで一冊の絵本にしなくてはと思うようになりました。

決して誰の目にも触れなくてもいい、まずは自分がこの悲しみを乗り越えるのに必要なことだったのだと思います。

お話がなんとか形になったとき、もしかしたらこのお話に共感してくださる方がいるのではと考えるようになりました。絵本作家の性分とでもいうのか、ほかの人とお話を共有したくなってきたのです。

まずは身近な方々にお話のダミーを見ていただき、添削を重ねました。

知り合いの編集者の方にもご意見をいただき、ただただ悲しいお話ではなく読後に希望がもてる内容を盛り込んで絵本の制作がスタートしました。

絵を描くことが辛(つら)いときもありましたが、それ以上に自分の気持ちを癒やすものでした。完成するのに一年近くかかりましたが、この秋に何とか出版させていただくことができました。

読後のご感想も少しずつ届き始めて、心を同じくされている方がいることを知ったのも作家冥利に尽きるものでした。

おわりに

冒頭にも述べましたが、こんなに長い間この仕事が続けられるとは思いもしませんでした。今でも、もう絵本のテーマは見つからないのではないかと不安にさいなまれることはよくあります。これからもこの悩みをもちつつずっと生きていくのかもしれません。

創作活動とは、日常に真剣に向き合いつつも、希望やユーモアを忘れずに、自分の気持ちや考えを絵本という形にすることではないかと、ここへきて改めて自分に言い聞かせています。

世界中がパンデミックという経験したことのない不安に包まれている今、どうしても他人を思いやる気持ちが二の次になりがちです。まずは自分と家族が健康であってこそ、これは当然です。でもそんな大人たちを見ている子供たちが身近にたくさんいることを忘れずに、これからも希望に満ちた絵本を作っていかなくてはと思うのです。

（いりやま　さとし）

〈座談会〉

どうしていますか？道徳の授業・評価～前編～

神奈川県　相模原市立淵野辺東小学校　校長　**川上　孝生**

東京都　練馬区立中村中学校　主任教諭　**須貝　牧子**

横浜商科大学　教授　**東風　安生**

教科化により道徳教育の質的転換や質の高い指導が求められる中で、現場で議論されている「児童生徒に対する評価」について、三人の先生方からお話を伺いました。

児童生徒の心の成長をみる見取りを

――道徳科の評価における困りごととして、どのような声が挙がっていますか？

川上　大別して四つあります。一つめは、評価のために児童生徒の資料をどのように収集するか。道徳には単元テストや作品等の評価物や評価規準がないことに戸惑っているようです。

二つめは、評価がしづらい児童生徒をどのように見取るか。『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別の教科　道徳編』（以下、『解説』）では「発言や記述ではない形で表出する児童の姿に着目するということも重要である」とありますが、授業者が一人で授業をしながら児童生徒を観察するのは難しいです。

三つめは、通知表や指導要録に記載する評価文。これが最も大きな悩みのようです。実際にふさわしくない評価文も見られますし、評価文例が載った書物を見ると「これでいいのか？」と疑問に感じるものもあります。

四つめは、日常の評価の処理について。授業ごとにノートやワークシートに教師が書くコメントは、配慮が必要なので時間がかかるようです。

須貝　私が勤務する中学校は三学期制で、学期ごとの通知表に記載する評価が必要なので、「評価のための時間がない」ことが一番の困りごとのようです。

中学の場合はワークシートを多用しますが、書くことが苦手な生徒が、例えば「今日は日本文化のことについてよく考えた」とワークシートに書いてあったとします。実際はいろいろ考えていたのに心の動きが言語化されていないの

でどのように見取ればよいかが難しい。

また現場でよく聞かれるのは「毎学期の評価が似てしまうがどうすればよいか」です。特に学習状況に関しては、学期ごとの評価が似通ったものになってしまうようです。

東風　研修会の講師として教育現場を訪問しますが、やはり評価についての悩みを多く耳にします。その際、特に注意してほしいと伝えているのは、「評価文に専門用語を使わないように」ということです。例えば「役割演技」や「発問」などは、保護者に伝えるには言葉の定義から説明する必要があります。それらに留意して、分かりやすく短文で所見をまとめなくてはならないことに先生方は苦労されているようです。

平成三十年度公立小・中学校等における教育課程編成・実施状況調査で、「『特別の教科道徳』を実施する上で学習評価の妥当性・信頼性の担保について課題や困難を感じている」と回答した中学校教諭は約八五％、小学校教諭は約七七％にも上りました。

ツールを用いて心の動きを把握する

――困り事や課題について、改善点やアドバイスをお願いします。

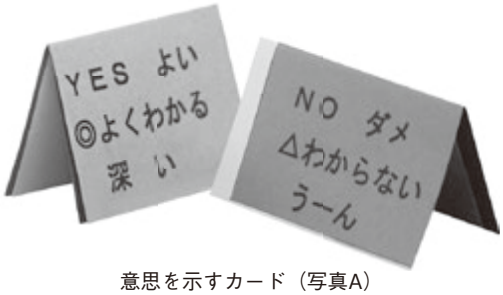
川上　評価のための資料は、児童生徒からアウトプットされるものなので、収集の機会、主に言語活動（発言、記述、自分の意思を示す）の場面を多くつくることが大切です。それは児童生徒の主体的・対話的な学習活動がないと成り立ちません。一方、言語表現が苦手な児童生徒に対しては、発言や記述ではない形で表出できるツールや機会をつくることを提案します。

私の学校では自分の意思を示すカード（写真A）や児童生徒の名前を書いたマグネットシートを使って、自分の意思や、問いに対する自分の立場を示せるようにしています。

また、ほかの手立てとして、TT（ティーム・ティーチング）、授業交換、ローテーション授業があります。私は「校長の道徳」と題して、一年間かけて六学年全クラスで授業を行います。事前に担任から日頃発言が少ない児童を聞いておき、挙手による発言でなく、私が児童を指名する形をとります。授業を始める前に「全員に指名します」と伝えるので、いつ指名されるか分からないですし、何度も指名されることもあるので児童は緊張し集中します。担任は教室の後方で児童の発言を記録します。言語による表出が苦手な児童のために、カードやマグネットで意思を示す場面をつくると、表情など細かな変化を担任が観察することができます。

通知表の評価文作成は、年度始めに全校で、各教科と同様に道徳科も、評価計画も含めた年間の指導計画を確認します。私の学校は研究指定校なので、着任一年目に私から評価文例を提示し、それをもとに先生方に作成してもらってガイドライン「道徳の評価について」を作成しました。これを使用して校内の道徳科の評価についてしっかり確認しています。

日常の評価のため、授業ごとにノートやワークシートを書かせなければと考える先生も少なくないでしょう。確かに授業の振り返りは必要ですが、児童生徒の過剰な負担にならないように、気軽に振り返りができるワークシートやノートの工夫が必要だと考えています。教師の負担も考えてコメントのパターンをいくつか用意しておくのはいかがでしょう。児童生徒の書いた文に下線を引いて「このことをもう少し考えたいですね」「よいところに気がつきました」



意思を示すカード（写真A）
この他、「どちらでも」のカードがある。

＊実際の座談会は、マスク着用の上、ソーシャルディスタンスをとって行いました。

川上孝生先生

等、児童生徒とノートで対話する方法や、ときには検印だけでもよいと思います。

須貝　中学生は教材を読んだときに、いろいろなことを考えます。自分の中に葛藤や疑問があってもうまく表現できないケースが多く見られるので、自分の心を表現する心情円盤をよく使っています。

また、生徒が記述している際に、教師が席を回りながら「ここ、あとで発表してくれる?」と生徒に小声で伝えると、彼らは自信をもって発表します。あらかじめ指名の順番もメモしておくと、生徒たちの発言で授業を展開することができます。

生徒同士の話し合いも大切にしています。その際、「何について話し合うのか」教師側がビジョンをしっかりもっていないと、ただのおしゃべりや意見を言い合うだけで終わってしまうことがあるので発問はとても重要です。

私の学校でもローテーション授業を行っていますが、その際は必ず担任がT2として入ります。生徒が思いつかないような、大人の視点で切り込んだ発言をT2にしてもらうと、生徒たちが新たな視点をもつ機会が生まれます。T1が発言してしまうと授業の誘導になる恐れがありますが、授業を生徒と一緒に聞いていたT2が自分の意見として発言することで、生徒にとってよい刺激となり、授業の幅が広がります。

また、黒板に自分の立場を示すスケールを表示すると、欄外に貼る生徒も出てきます。聞いてみると「すごく反対!」という返事が（笑）。子供たちの豊かな心情、思いをいろいろな方法を使って見取ることが大切です。

東風　そもそも評価は、「測定そのもの」と「測定のための情報収集」と「教育的価値を与えること」に大別できると思いますが、私は現場の先生方に、校内でこれらのどの部分に課題があるのかを明らかにして検討するようにと、アドバイスしています。

川上先生のように校長がリーダーシップを取って授業の方針を示していればよいのですが、先生がそれぞれ独自のやり方で授業を行っている学校が多いように思います。その場合、情報を共有して、チームをつくって検討を重ねると、教育的価値をつけるための授業や評価につなげることができます。

須貝牧子先生

中学校ではローテーション授業が増えています。担任だけでは見えない視点で情報収集し、担任一人の思い込みに偏らないようにすることが大切です。授業の大変さと効率性を先に挙げてしまって教育的価値を落としてしまうのは本末転倒なので、あくまでも児童生徒を励まし、意欲を促す所見になるように、もっと研究してほしいと願います。

授業に参加する姿や心の成長が伝わる所見を

――では、具体的な教材を使って評価の実例とともにNGポイントを教えていただけますか?

川上　先ほどお話ししましたが、本校では、「道徳の評価について」という資料の中に「所見チェック項目」（＊詳細は『道徳ジャーナル』104号参照）を実例として載せていますので参考にしてください。道徳性そのものの評価になっ

ていないか、生活・行動所見と混在していないか、あくまでも道徳科の評価としてブレないためにチェック項目があるとよいと思います。

小学五年生の「手品師」（内容項目：正直、誠実）の評価文例を紹介します。「『手品師』の学習では、手品師の生き方を考え、自分の心に誠実にしたがい生きる主人公に共感（感動）し、誠実に生きるとは何か、仲間と議論し、考えを深めていました。」

これを「『手品師』の学習では、自分の夢をあきらめ、約束を守る主人公の誠実さに気付き、誠実さについて理解することができました。」と書くとどうでしょう。これでは、「是が非でも約束は守りなさい」「夢をあきらめても約束を守り誠実に生きよう」というメッセージだと取られる危険があります。約束を守ることが誠実なのではなくて、自分の心に誠実に行動した結果が、子供との約束を守る行為だったのです。

東風安生先生

特定の価値観を児童生徒に押しつけるような評価はNGです。

須貝　内容項目に対する評価になっているものはもちろん不可ですが、ポイントがずれているものや、当たり障りがないように書かれた評価文では、子どもたちが通知表を手に取って目にした際に教育的効果が薄いのではないかと感じてます。

中学二年生の「厳かなるもの」（内容項目：感動、畏敬の念）の評価文例を紹介します。

NGな評価文例は、「富士登山をした経験を思い出し、富士登山に行ったときの話をグループ内で積極的に話していました。」です。授業に積極的に参加している姿は伝わりますが、道徳とは関係ない内容です。

練馬区では臨海学校があるのですが、そのときに自然に触れたことを思い出し、「臨海学校で遠泳を終えたときに、海に感謝したくなったことを思い出し、自然に対してそう感じることができた自分の心の豊かさに気付くことができました。」という評価文なら、教材を通して変化した自分や、自分の中に「そんな心があるんだな」と再認識したことを取り上げているので、生徒に対する励ましにつながると思います。

東風　通知表は保護者に伝えるものだとすれば、所見に書いた内容とそのエビデンスが載っていることが必要です。所見を書く教師の主観や思い込みが入ることはNGです。児童生徒の記述や発言に触れるのもよいでしょう。

小学一年生の「はしのうえのおおかみ」（内容項目：親切、思いやり）の、ある先生の評価文を紹介します。

「道徳ノートに『わたしは、おおかみと同じようになってしまいます。だからくまさんのようになれるように親切にしてみんなに喜んでほしいと思います。』と記述し、思いやりの価値に対する深まりが見られました。」

この評価文だと、子供がノートに書いた言葉を教師が見て評価したことが保護者に伝わり、児童の学習状況も伝わります。

一方で、教材の中には評価しづらいものもあります。例えば、内容項目「感動、畏敬の念」などは、どのように見取るのか。須貝先生が先ほど言われたように、内容項目について教師があれこれ言うのではなく、児童生徒が学習によって内容項目に対する考えをどう深めていったかを見取ることが重要ではないでしょうか。

（後編へ続く）

取材・文／岡本侑子　写真／藤田雄二

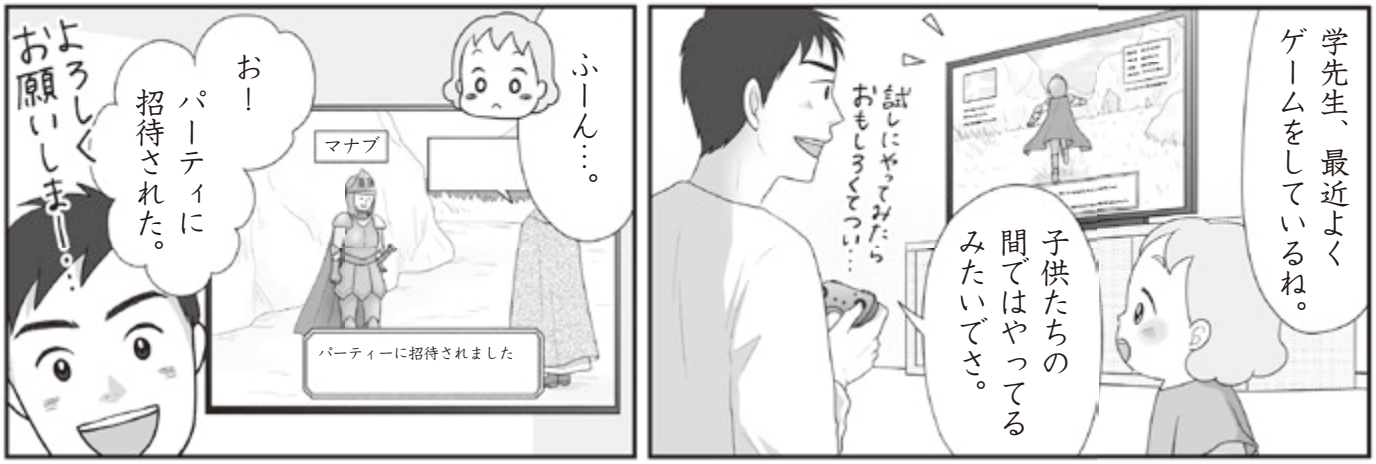
＊道徳ジャーナル104号の記事は，下記HPよりご覧いただけます。
学研 学校教育ネット　道徳ジャーナル
https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/others/journal/doutokuj/

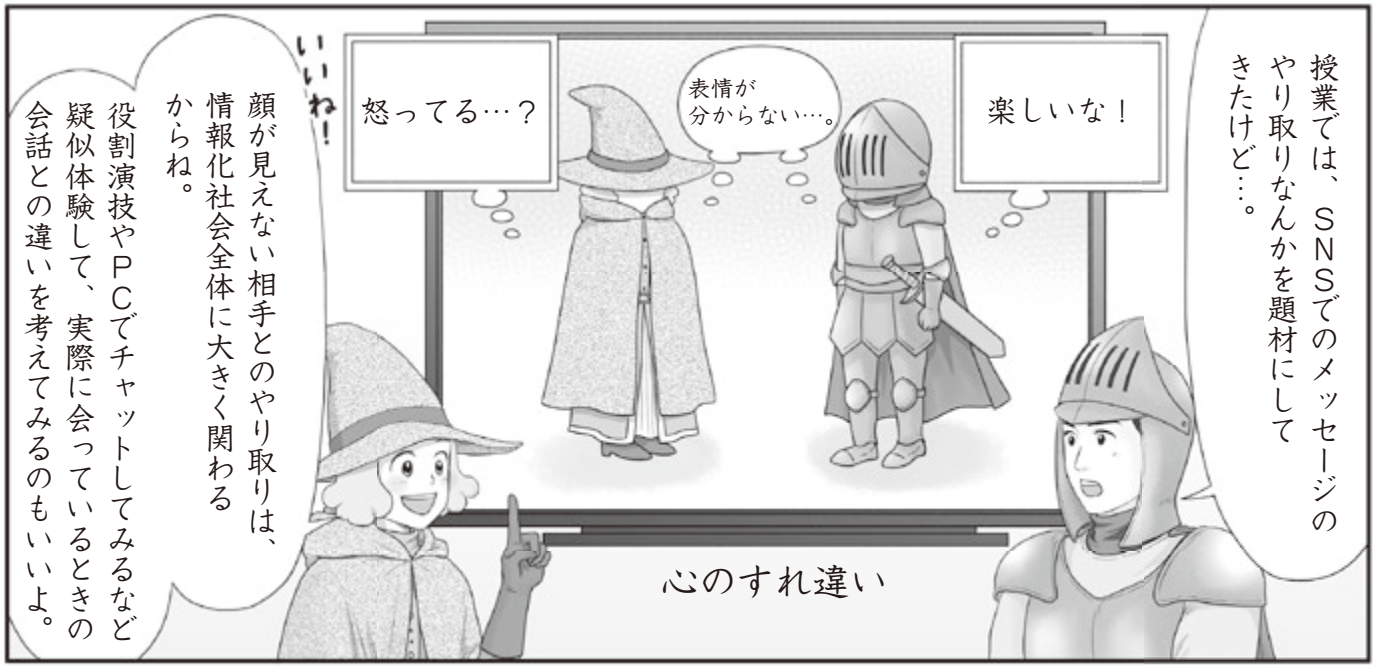
どうなるこれからの道徳授業

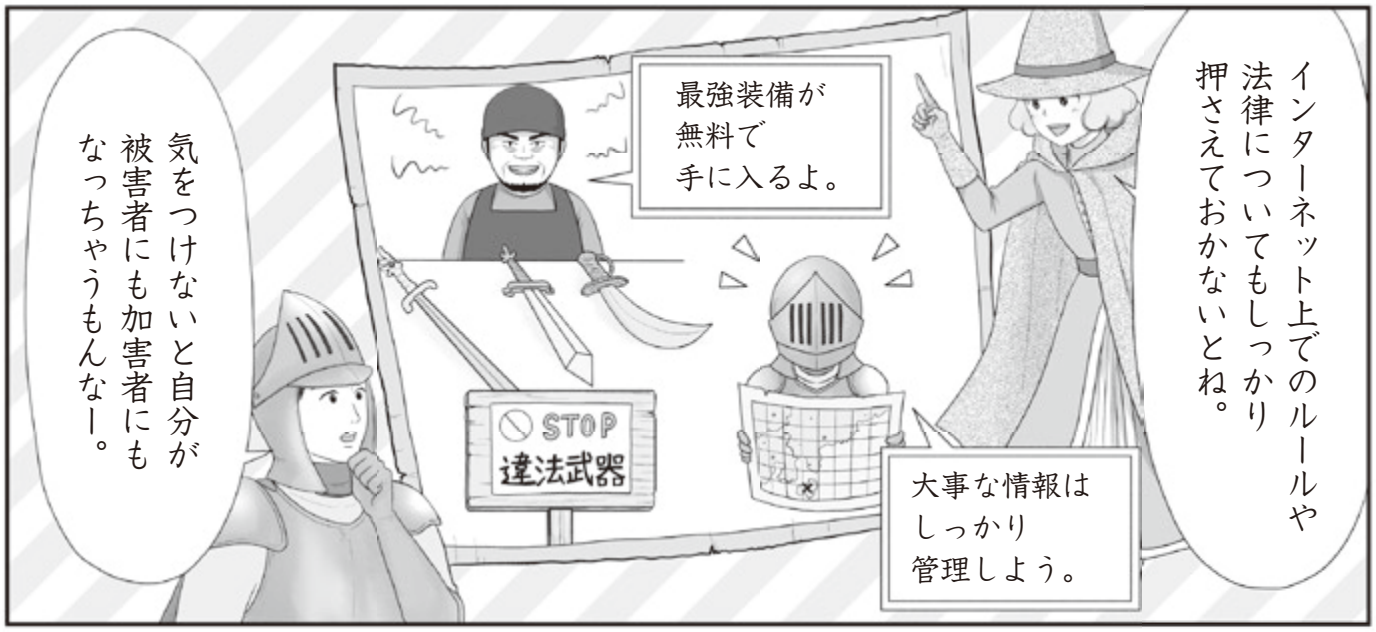
連載10回　情報モラル編

監修・法政大学兼任講師 廣瀬仁郎先生
マンガ・のはらあこ

とくちゃん　学先生




授業では、ＳＮＳでのメッセージのやり取りなんかを題材にしてきたけど…。
楽しいな！
表情が分からない…。
怒ってる…？
いいね！
顔が見えない相手とのやり取りは、情報化社会全体に大きく関わるからね。
役割演技やＰＣでチャットしてみるなど疑似体験して、実際に会っているときの会話との違いを考えてみるのもいいよ。
心のすれ違い


インターネット上でのルールや法律についてもしっかり押さえておかないとね。
最強装備が無料で手に入るよ。
STOP
違法武器
大事な情報はしっかり管理しよう。
気をつけないと自分が被害者にも加害者にもなっちゃうもんなー。

情報モラルといっても、そのほとんどは日常のモラルとつながっているんだ。
日常でのモラルを育てることと情報化社会の仕組みを理解すること。そしてこの二つを組み合わせることが、情報モラルの指導では大切だよ！

こらっ
ゲームのやりすぎに注意!!
何だかレベルが上がった気がする！　じゃ、冒険に行ってくるね！
次回はＳＤＧｓを意識した授業づくりについてご紹介！

SDGs×道徳

話題のSDGs。中学校の学習指導要領にも盛り込まれています。SDGsの解説をはじめ、「取り入れたい！」と思える学校現場における実践などを、連載でご紹介していきます。

連載 第4回

学校全体（ホールスクール）で「持続可能な社会の創り手」の育成を

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）
調査・研究統括　木村大輔

今回は、学校全体で「持続可能な社会の創り手」を育成するための視点について紹介します。児童生徒が「持続可能な社会の創り手」として主体的に学び行動するようになるためには、学校という組織全体を動かしながら推進していく体制、システムが必要になります。なお、学校全体での実践は、ESDでは「ホールスクール」アプローチと言われています。

●スクールリーダー（校長をはじめとした管理職）が学校改革の中枢

私は2018年よりユネスコバンコク事務所が実施している「革新的なスクールリーダーシップ」の会議に出席しています。会議では、「校長は学校の中枢神経である」として、SDGsなどの新しい時代の教育を学校全体の取り組みとして浸透させるため、校長のリーダーシップ向上に関する取り組みを始めています。

これまで行ってきた教員研修で、たくさんの秀逸な取り組みをされている先生方に出会う機会がありました。そのような先生方の中には、周囲の教員、管理職が、SDGsや国際理解教育などへの理解に乏しく、孤軍奮闘している方も少なくありませんでした。受験の役に立たない、教科書どおりに進めればよいなど、日々の学習活動を重視する中で、SDGsや社会・世界について学ぶ意義や価値の浸透が進んでいないと感じています。

現在、教育はグローバルな政策となり、世界各国が同じ方向を目指して教育のビジョンをつくる過程にあります。入試改革や学習指導要領の改訂は、これからの世界を見据えたものです。「持続可能な社会の創り手」の理念が掲げられたのも、答えのない社会、未来に向けて「主体的・対話的で深い学び」を通してそれぞれが行動できるようにするための手段です。効率的に解答するスキルを磨くだけではなく、何を学び、何ができるようになるか、そして、どのような未来を描きつくっていきたいかという個々の価値観を形成する学びが大切です。その過程で、SDGs（ESD）を通して社会・世界を学ぶ機会が重要な「手段」であるとされ、学習指導要領に組み込まれました。

SDGsを学ぶことが目的なのではありません。SDGsの大切な理念である「誰一人取り残さない社会」を創るためには、個々の行動変容が必要です。この行動変容を促す学びを、教員・児童生徒・保護者・地域社会が個々の幸せ≒ウェルビーイングを追求しながら学校のあり方を考えるための「手段」として扱ってください。SDGsを達成するためだけでなく、SDGsを学ぶことで、社会における学校のあり方について考え、自分たちがどのような社会を創っていきたいか考えるための大切な視点になると思います。

こうした全体を俯瞰した視点と取り組みを浸透させるためには、管理職のリーダーシップ、具体的な働きかけが必要です。そのため、校長をはじめとしたスクールリーダー

道徳ジャーナル108号　令和3年2月発行
発行所　株式会社学研教育みらい　**発行人**　甲原　洋／**編集人**　木村友一
本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部　〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8
内容については…TEL（03）6431-1565（編集）　**それ以外のことは**…TEL（03）6431-1151（販売）
「学研 学校教育ネット」　https://gakkokyoiku.gakken.co.jp　●『道徳ジャーナル』のPDF版および電子版は、WEBページから。
9300007569

図１（SEAMEO INNOTECHより、GiFT翻訳）

の意識改革から、教員の教育観の更新が必要だと言われています。

図１は、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）が東南アジア諸国の教員に調査をし、これからの時代の校長に必要な資質・能力をまとめたものです。

校長自身の継続的な職能開発、カリキュラムの実践と改善といった部分だけでなく、人事や資源のマネジメント、プロジェクト管理、地域や関係者との連携強化といった、学校経営の中枢に位置付けられるマネジメント能力なども挙げられています。求められる資質・能力を明記し、支援していくことで、校長のリーダーシップを発揮しやすい土壌を作っていこうとしています。

こうした背景を鑑みると、今後校長や管理職を対象に、新しい時代の教育を学校全体で進めていくための研修や、多忙な教員の環境改善に向けた具体的な取り組みに関する研修なども実施されることになるでしょう。

では、「誰一人取り残さない」学校・社会創りや、SDGsを学びの中心に浸透させるためには、具体的にどのような取り組みが必要なのでしょうか。いくつかのステップに分けてご紹介します。

●学校の経営方針にSDGsの理念が入っているか

既にいくつかの地域では指針が示されていますが、「持続可能な社会の創り手」の育成に向け、その指針を学校経営目標に組み込むことが一つ目のステップです。この経営目標をつくる過程に教員を巻き込み、それぞれがどのような思いで児童生徒に向き合っているか、どのような未来を望んでいるかなど、各教員の思いを拾いながら、全教員参加型のプロセスでSDGsの理念を理解していくことが大切だと考えています。

私はよく「あなたはなぜ先生になったのか、何を成し遂げたくて先生になったのか」「教育を通してどのような児童生徒を育てたいか」「教育を通してどのような社会を創りたいか」という問いかけをします。

一人一人の思いを拾い、学校が置かれている地域性と「持続可能な社会」との位置付けについて教職員間で議論しながら、学習活動やカリキュラムに落とし込みます。

そうすると、教員自身が未来・社会を描く一員として参画でき、自分事として学校の目標を捉える機会になります。

図２は、国立教育政策研究所が示した「持続可能な社会づくりの構成概念（例）」です。まず教員間のコミュニケーションからこうした視点を実践し、SDGsの理念を浸透させる機会にするとよいと思います。

―持続可能な社会づくりの構成概念（例）―

Ⅰ　多様性（いろいろある）
Ⅱ　相互性（関わり合っている）
Ⅲ　有限性（限りがある）
Ⅳ　公平性（一人一人大切に）
Ⅴ　連携性（力を合わせて）
Ⅵ　責任性（責任を持って）

図２（文部科学省：「ESD推進の手引」より）

●目標から具体的に育みたい資質・能力を考える

目標を定めたら、具体的に児童生徒にどのような資質・能力を身に付けてもらいたいか考えます。第１回、第２回で紹介した、①認知領域（知識・思考力）、②社会・情動領域（社会性、対人関係構築能力、情動、価値観）、③行動領域（行動、行為の変容につながる領域）といった領域を意識して考えます。生徒に身に付けてもらいたい資質・能力は、同時に教員にも必要な資質・能力だと思います。是非、教員はこの他にどのような資質・能力を身に付けるべきかも話してみてください。

●実施体制、既存の活動と結びつける

また、それぞれの教員が行ってきた学習活動や学校全体で行っている課外活動、部活動など、既存の活動を棚卸しします。実は、これまでの活動の中にも、SDGsに深く関わるものはたくさんあります。しかし、前例踏襲で続けていたり、その学習の意義を認識しないまま続けていたりするものもあると思います。棚卸しをすることで、

・持続可能な社会の創り手育成に必要、不必要なもの
・持続可能な学校づくりに必要、不必要なもの
・手段が目的化している学習活動

という視点で、残すもの、中止するものの取捨選択ができます。

取捨選択された活動から、何をどのようにつなげていくか検討し、学校経営目標に合った学びをどのようにつくることができるかを考えていきます。

また、GIGAスクール構想によって学校のデジタル化が進む絶好の機会ですので、デジタル化して円滑にコミュニケーションをとったり、これまで非効率に行われてきた事務作業などを効率化したりすることに向き合ってもよいでしょう。SDGsで資源の有限性について話し合っている一方で、大量の紙を配布して学びを続けることは、SDGs的ではありません。「誰一人取り残さない」という言葉だけで、新たな取り組みをして最適化しようとしないのであれば、それは即ち学校の持続可能性も危ういのではないかと思います。

●校外の関係者、機関のマッピング

これまで積み上げてきた行事や学習活動などの取り組み、学校として持つ資源が見えてきたら、次はそれらをどのように活用したらよりよくなるか考えてみてください。校内で全てを完結するのではなく、地域に開かれ、つながる学校をつくるためには、校外の資源を活用することも大切です。

地域社会との関わりをつくることで新鮮な視点が加わりますし、人事異動に左右されず実施する体制ができるかもしれません。何よりも大切なのは、学校の経営目標、育成を目指す児童生徒像が完成した後、今学校にある資源の中で足りないものをどう補っていくかです。その際、誰にどのように依頼するか、優先順位は何かなど、具体的なことも共に考えると、変化を生み出すことができます。

●おわりに

今回紹介したもの以外にも、第３回で紹介したカリキュラム・マネジメントを見直す中で、既存の教科にSDGsの理念を組み込んだり、ESDカレンダーを作成して一定期間を通してあるテーマについて学ぶ機会をつくったりすることが考えられます。業務を整理することで、児童生徒の学びのための時間がつくれて、教員の意識の統一ができるのであれば、この時間は持続可能な学校づくりに必要な投資と言えるでしょう。多忙な職場のシステムの根底にあるのは仕事の仕方、業務の優先順位、人材の配置など、細かい部分にあると思います。コロナ禍で学校の機能の見直しができる今こそ、未来に向けた投資をする学校・地域が増えることを願っています。

次回は、学校全体（ホールスクール）でSDGsに取り組む小学校の実践を紹介します。